

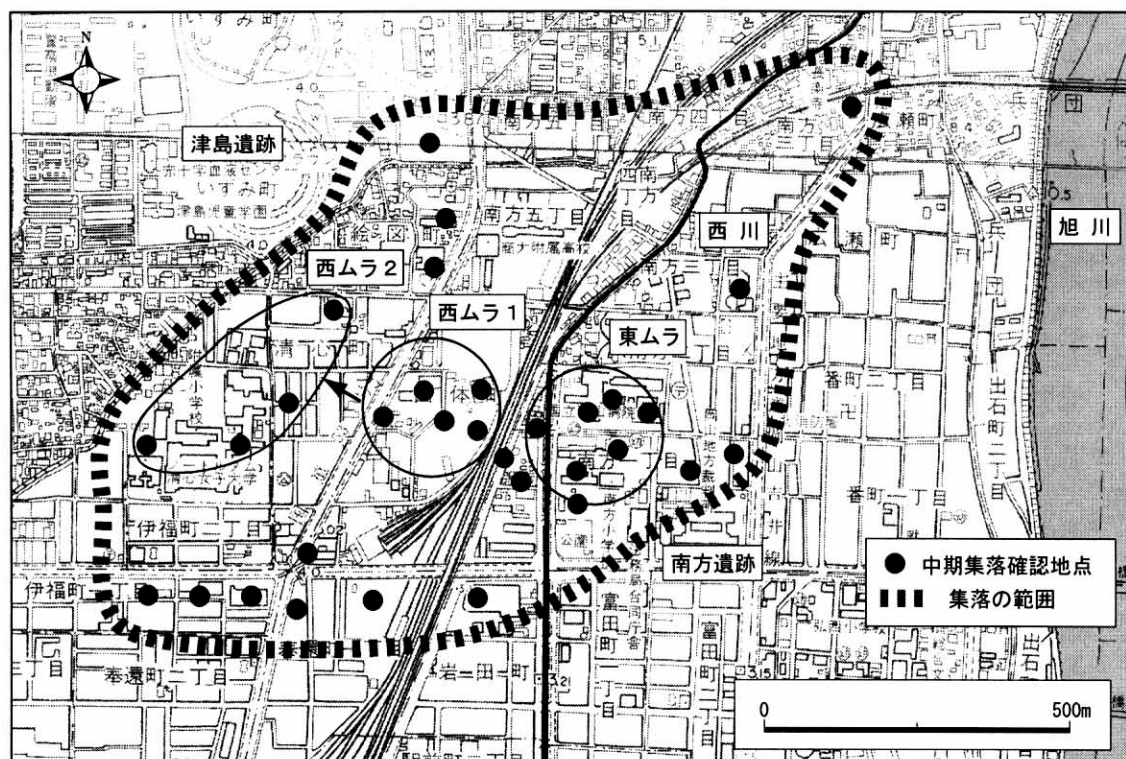
## 南方遺跡現地説明会資料

－後楽館中・高等学校校舎南棟部分の発掘調査－

平成21年10月3日 岡山市教育委員会文化財課  
岡山市埋蔵文化財センター

平成21年5月から南側の体育館棟部分の発掘調査に引き続き、校舎南棟部分の発掘調査を開始しました。体育館棟部分では、弥生時代前期の集落の入り口が検出され、北側に位置する旧国立病院跡では弥生時代前期から中期にかけての濃密な遺構があることが確認されています。今回の調査区では、その中間部分であることから、集落の入り口背後の様子が明らかになることが期待されました。

まず南方遺跡の概略を説明します。南方遺跡は、旭川西岸に位置する弥生時代前後半から中期にかけての集落遺跡で、中期には東西1.2km、南北1kmの範囲に広がる大集落です。過去に行われた発掘調査では、多くの遺構や遺物が出土しており、中部瀬戸内地域の核となる拠点集落であったと推定されます。集落の内部には、いくつかの微高地があり、微高地ごとに集落が営まれ、それが集まって南方遺跡を形成しています。とくに遺構や遺物が密集する地点が2ヶ所あり、それぞれを南方遺跡の中心となる西ムラと東ムラと呼称します。両ムラは旧西川を境にしています。中期の終わり頃になると、東ムラは衰退し、西ムラは西側に移動します。



南方遺跡の範囲

発掘調査の結果、遺構面が 4 面確認されました。

**(近世)**

調査区の北東部分に粘土取り穴が検出されました。

**(古墳時代)**

調査区中央やや東側で柱穴状のピットが検出されましたが、建物の柱ではないようです。周辺には水田層が広がっており、水田化されていない高まり部分に掘られていました。

**(弥生時代後期)**

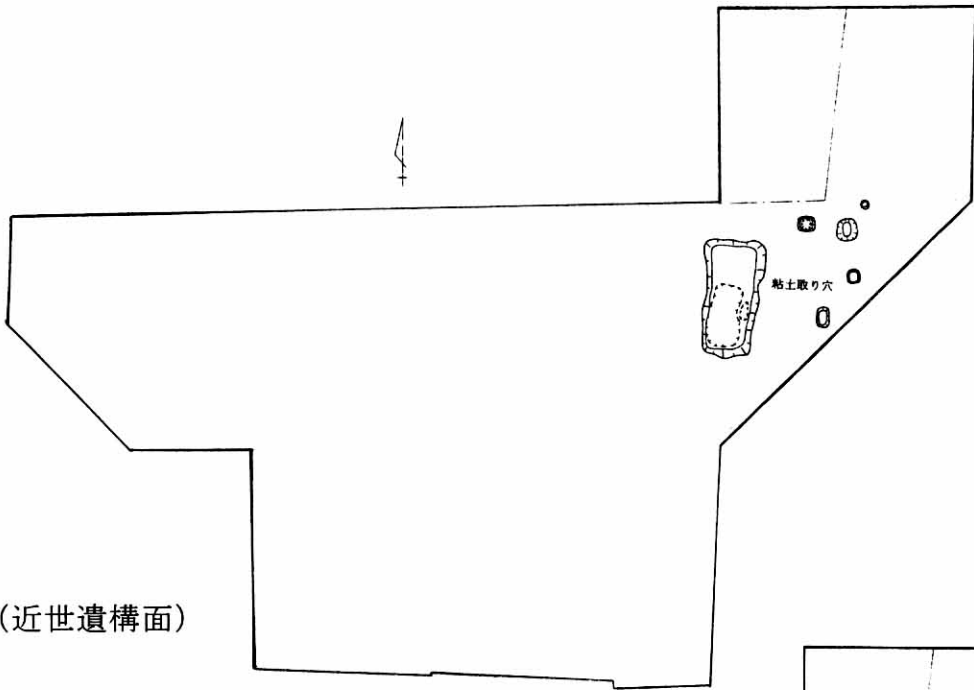
薄い洪水層が存在していたことから、弥生時代後期の水田畦畔（あぜ）が部分的に検出することができました。百間川遺跡群で検出されている同時期の水田畦畔とよく似ています。

**(弥生時代前期・中期)**

調査区内の両側にはやや高い地形となっており、調査区の大半はその地形に挟まれた谷底状の地形に相当します。とくに西側の高い地形部分は、北側の遺構密集部分の南端に相当し、土壌等がやや密度を増す傾向があります。谷底状地形の部分には、中期の長方形、もしくは不整形の浅い土壌が途切れながら列状にならんでいます。体育館棟部分の調査でも同様の土壌が検出されており、一連のものと考えられます。この土壌群の性格については、これから詳細に検討していきますが、現段階では土を掘り取った跡の可能性を考えています。列状に並んでいるのは掘り取った土を列状に盛ったため、平たく表現しますと、あまり積極的に利用することのない谷底状地形の部分に集落中心部に至る通路をつくっており、その通路の土盛りに用いられた土壌と推測しています。北側の集落中心部分は、前期から中期の遺構があり、その間安定的に集落を形成したことが伺われます。そのため中期になっても同じような場所に集落の入り口と通路が設けられており、列状の土壌群が体育館棟部分の前期集落の入り口部分と極めて近い位置にあるのだと推測されます。

**まとめ**

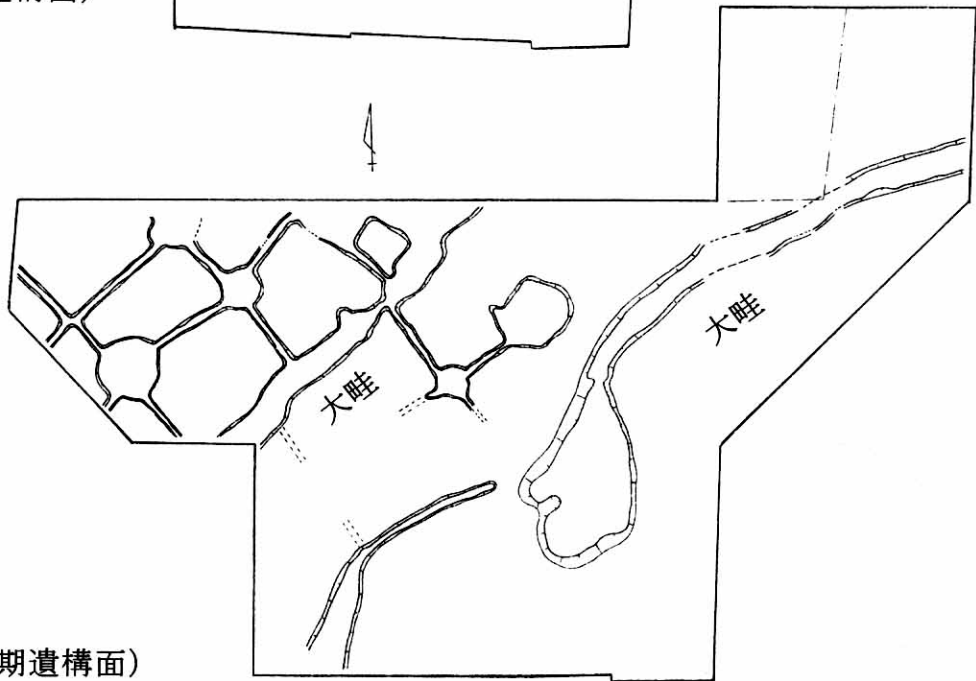
今回の発掘調査により、弥生時代前期から中期における大集落の入り口から集落中心部に至る様子が明らかとなりました。南方遺跡を理解する上では貴重な調査例になるものです。また、弥生時代の集落の細部を復元する上でも貴重な成果になるといえます。



(近世遺構面)

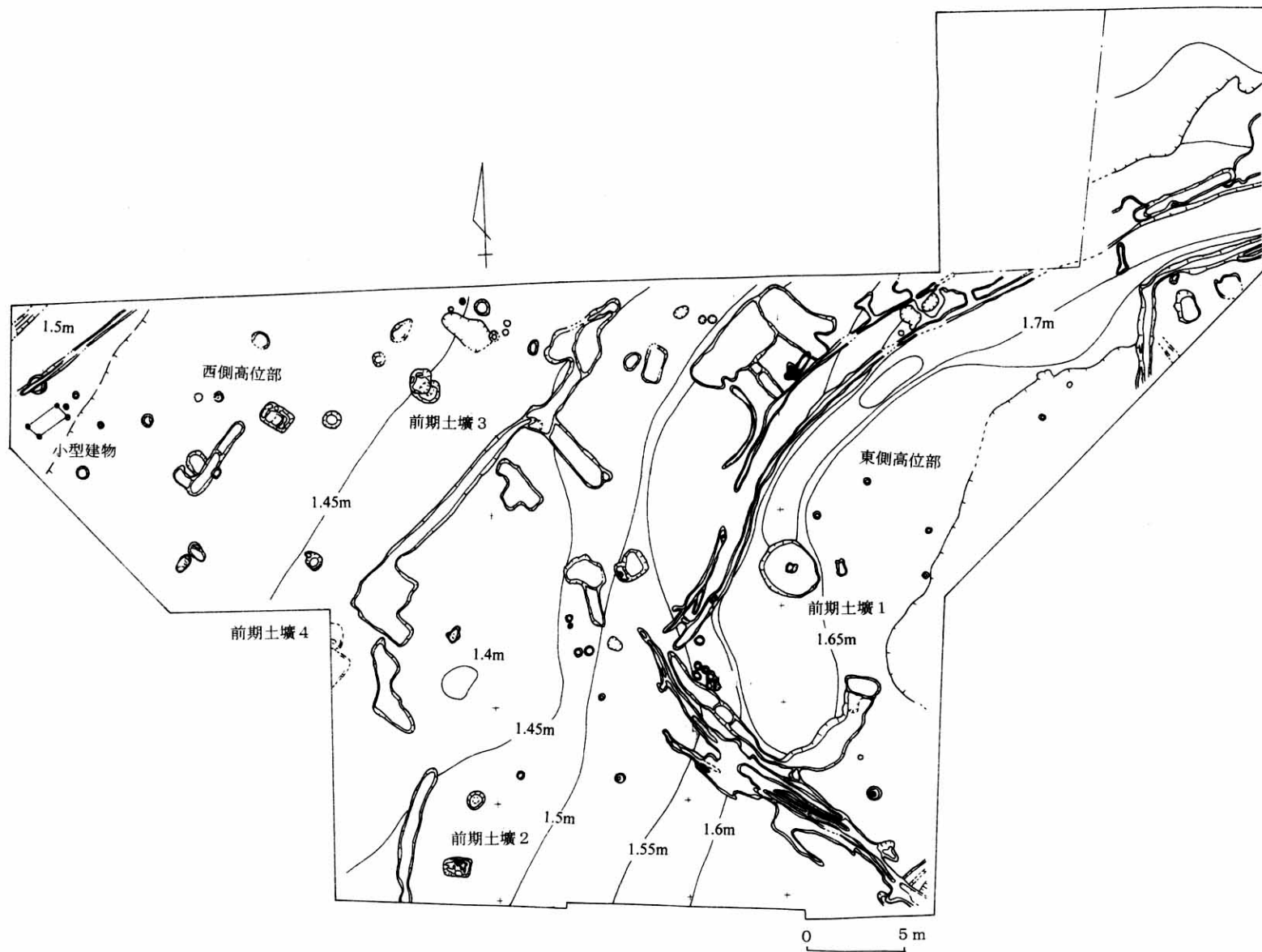


(古墳時代遺構面)

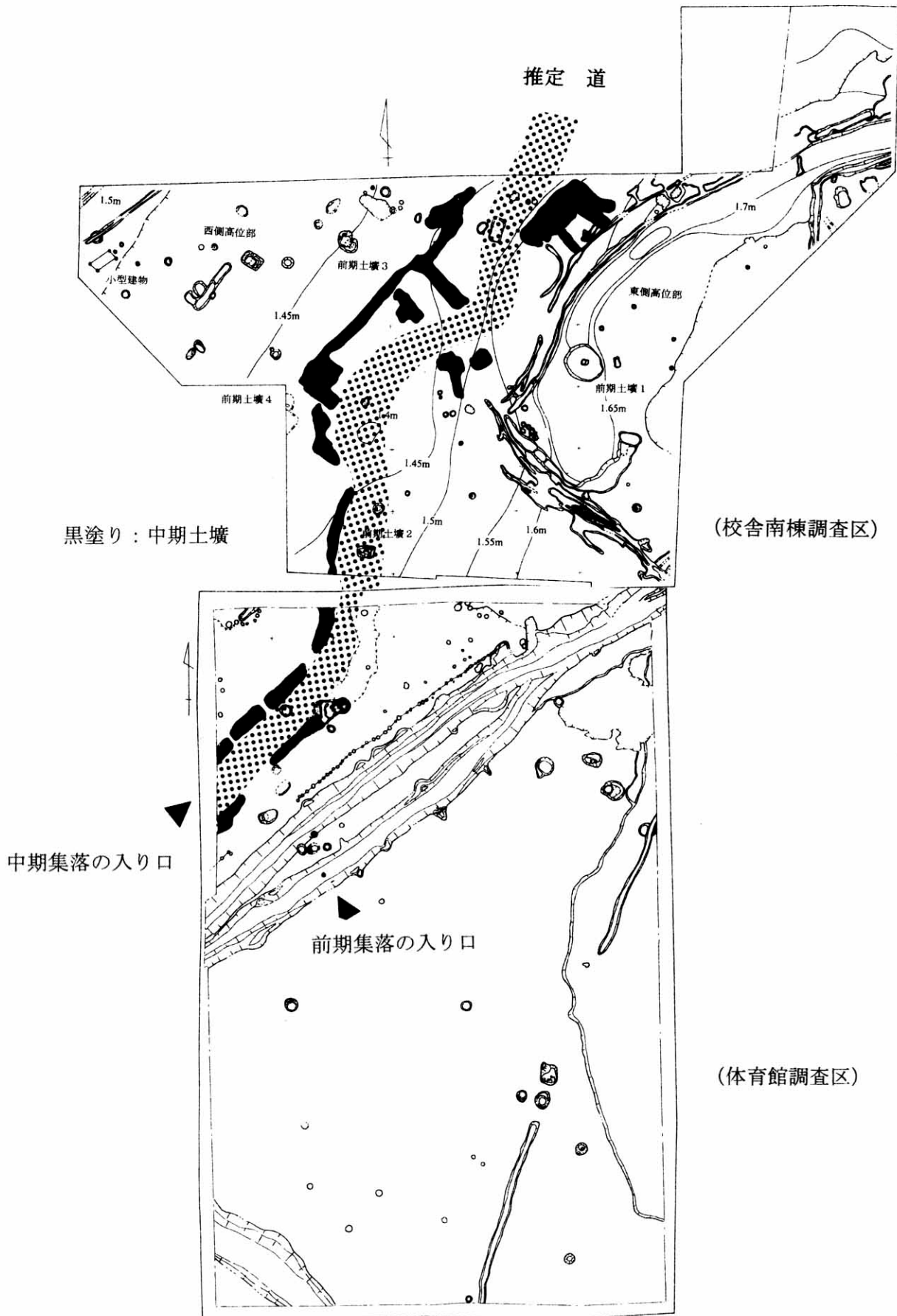


(弥生時代後期遺構面)

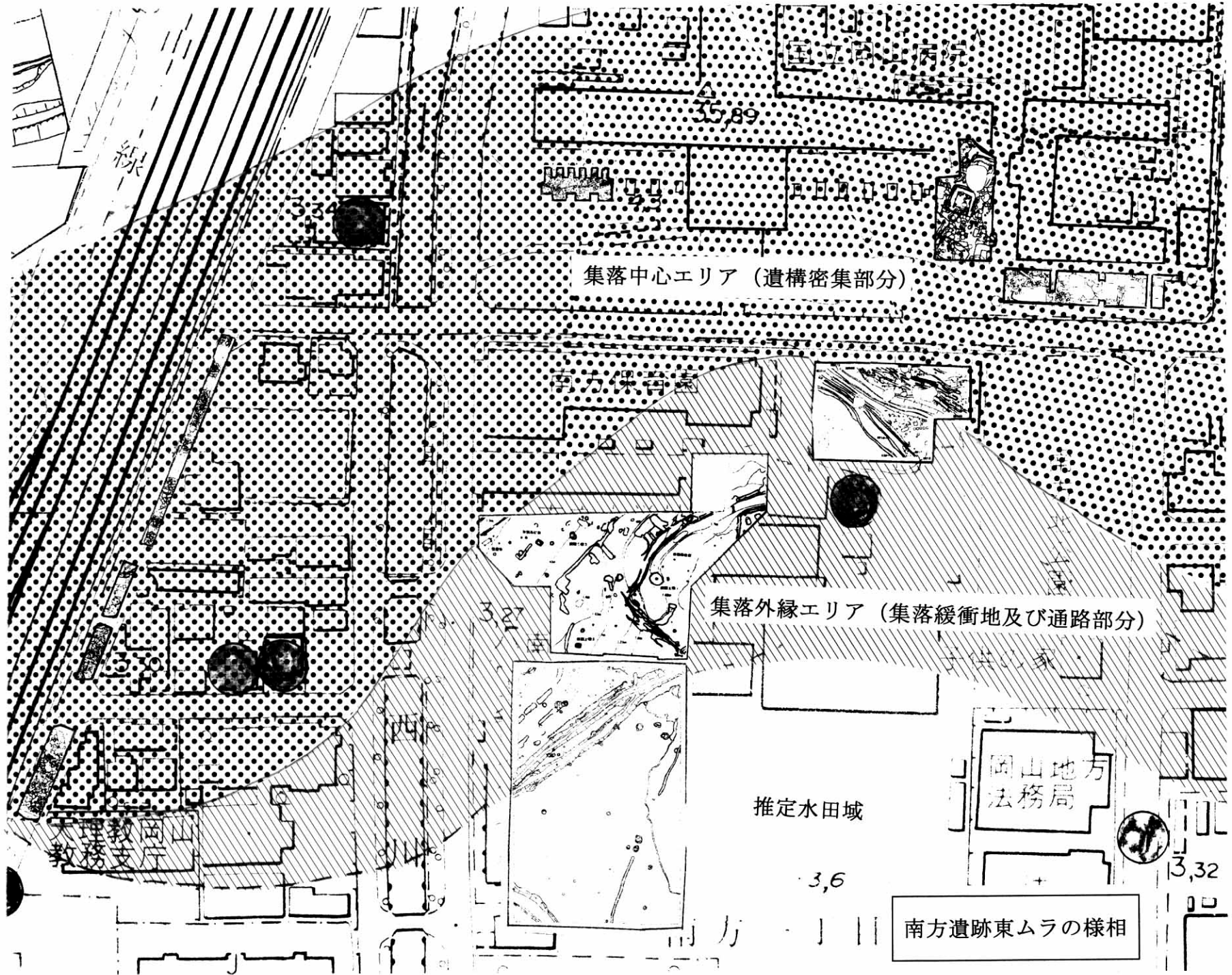
0 5 m



(弥生時代前期・中期遺構面)



(弥生時代前期・中期遺構面体育館棟調査区との合成図)



集落中心エリア (遺構密集部分)

集落外縁エリア (集落緩衝地及び通路部分)

推定水田域

岡山地方  
法務局

南方遺跡東ムラの様相

線

35,89

3,34

南方保存遺跡

3,27

3,30

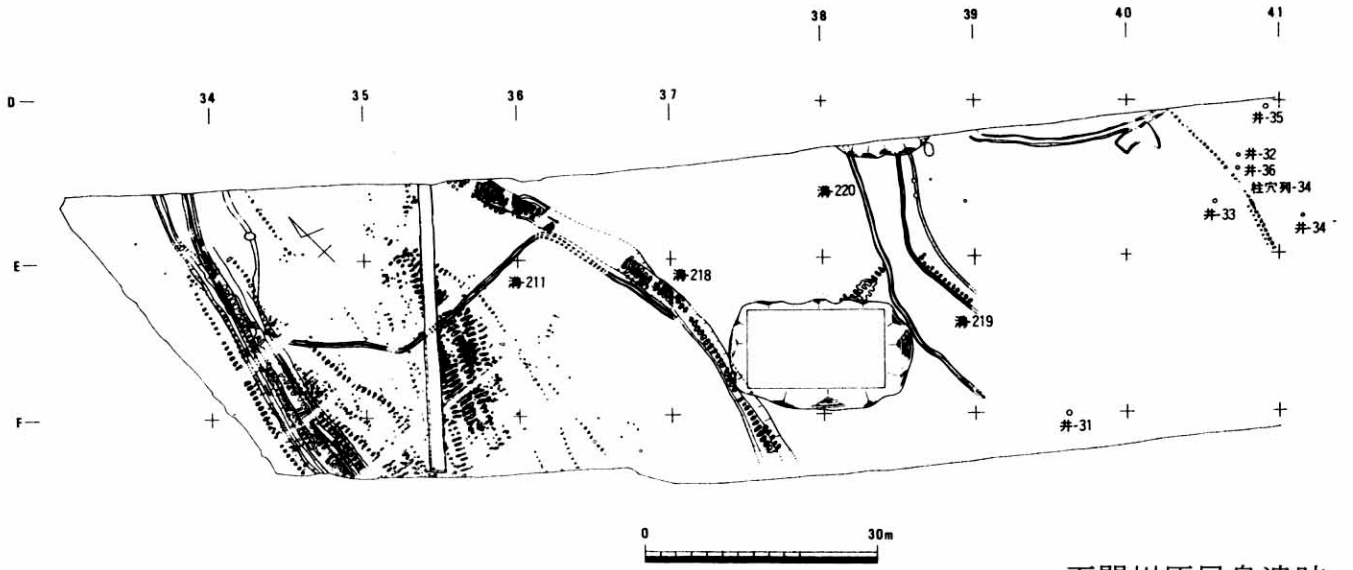
3,6

3,32

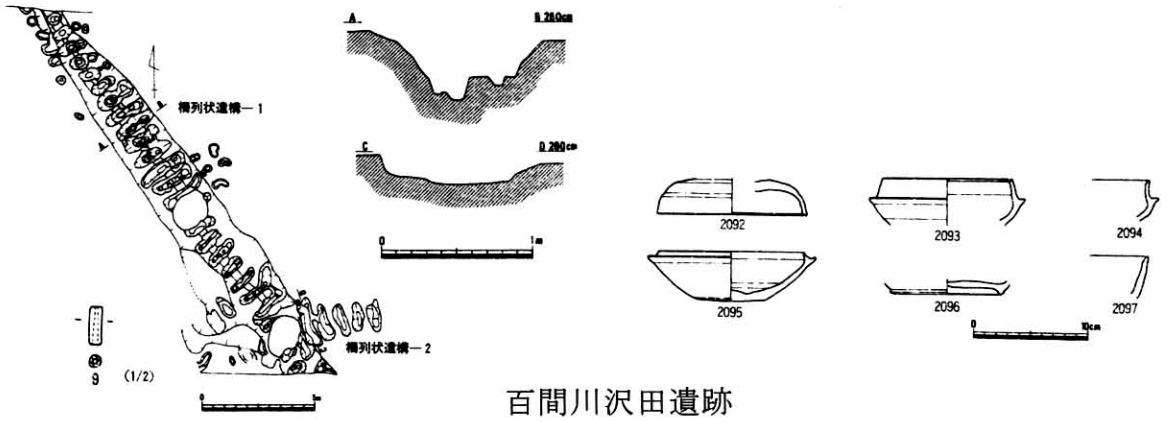
岡山地方  
法務支庁

南方

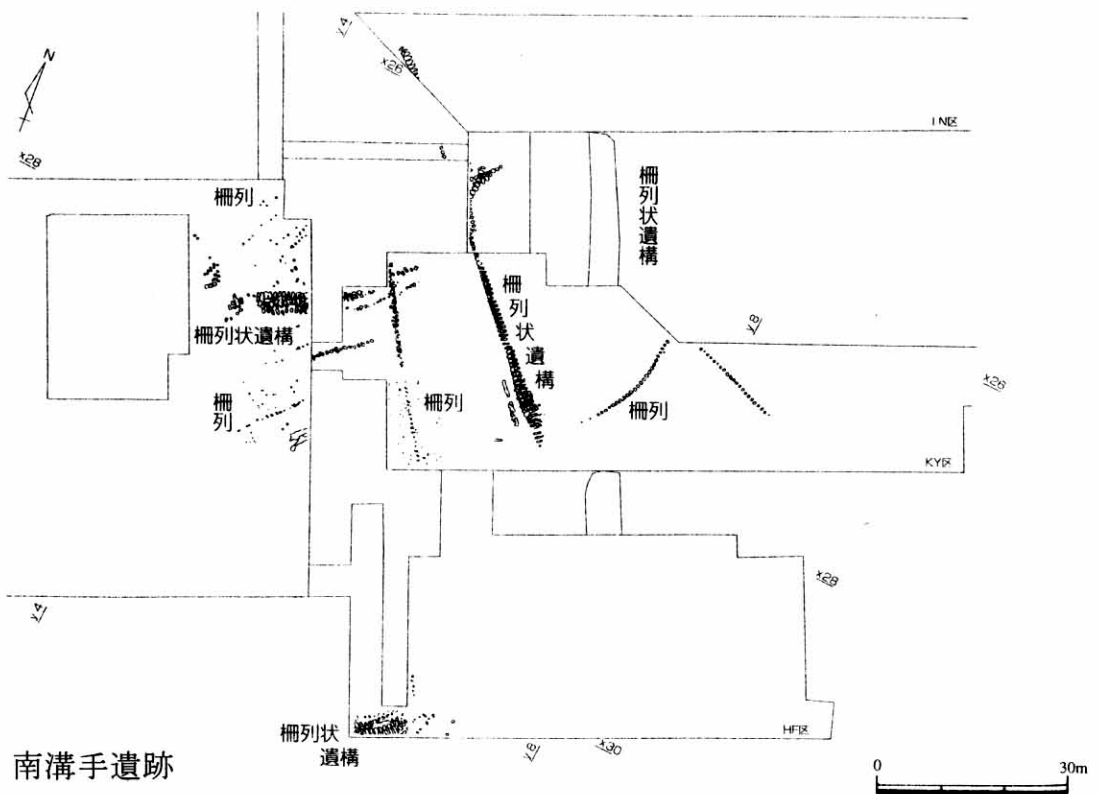
古墳時代の通路状遺構例



百間川原尾島遺跡



百間川沢田遺跡



南溝手遺跡